

アメリカ合衆国における英語研修レポート

大 西 光 興

アメリカ合衆国における英語研修レポート

大 西 光 興

1977年7月22日から61日間、州立テキサス大学オースチン校における英語集中訓練と、カリフォルニア州サンタ・ローザにおけるホームステイおよび当市の中・高校での授業参観と教育実習を中心とした英語研修に参加できたことをありがたく思っている。この英語研修講座は日米協会と国際教育交換協議会(C. I. E. E.)の主催、都道府県教育長協議会、全国国立大学附属学校連盟、日本私立中学高等学校連合会の後援協力によって行われてきているもので、今年は10年目にあたる。すでに全国から2千名余の英語教師がこれに参加し、多大の成果を挙げてきていることを聞き、私も英語教師として米国における英語研修の意義と必要性を痛感したため、貯金をはたいてこの講座に参加することを決心した。今回の参加者196名は5つのグループ(テキサス大・ブラウン大・ミシガン大・ペンシルバニア大・シラキュース大)に分けられ、私はテキサス大学で研修を受けるグループに加わることになった。テキサス・グループ42名(うち女性8名)の旅程と研修内容の概要を次に述べる。

〔1〕 旅 程

- ① 7. 22 羽田発(日航006便)
アンカレッジ経由、ニューヨーク着
7. 22~24 ニューヨーク市内見学, 泊
- ② 7. 25~26 ワシントンD. C. 見学, 泊
- ③ 7. 27 マウント・ヴァーノン見学, ローリー泊
- ④ 7. 28 シャーロット泊
- ⑤ 7. 29 アトランタ泊
- ⑥ 7. 30 モントゴメリー泊
- ⑦ 7. 31~8. 1 ニューオーリーズ泊
- ⑧ 8. 2~3 ヒューストン泊, N. A. S. A. 見学
- ⑨ 8. 4 オースチン着
8. 4~30 テキサス大学にて研修
- ⑩ 8. 31 ペイコス泊
- ⑪ 9. 1 カールズバード泊
- ⑫ 9. 2 アルバカーキ泊
- ⑬ 9. 4~5 グランド・キャニオン見学, 泊

- ⑭ 9. 6 バーストウ泊
- ⑮ 9. 7 サンタ・ローザ着
- 9. 7～18 サンタ・ローザ市内でのホームステイと教育実習
- ⑯ 9. 19～21 サン・フランシスコ見学, 泊
- ⑰ 9. 22 サン・フランシスコ発 (日航 001 便)
- ⑱ 9. 23 羽田着。

延々6000キロにも及ぶ北米大陸の旅はすべてチャーターされたグレイハウンドバスによってなされた。バスは50人乗り, エアコン完備トイレ付きで, ハイウェイを平均時速60マイル(96キロ)でつつ走り, 行く先き先きで私に鮮烈な印象を与えつづけた。各地の景観の詳細について述べることは別の機会にゆずり, 今回は研修に関して説明することとする。

〔2〕 テキサス大学での研修

1. オリエンテーション

8月4日夕方, われわれ一行42名はテキサス大学の寮のひとつ, The Castilian に到着, 2人で1部屋を割り当てられた。部屋には机, 椅子, ベッド, 戸棚, バス, トイレ, 厨房設備, エアコンが完備し, ゆったりしたスペース, 窓からのすばらしい眺め, まったく申し分のない快適な寮である。夕食後, 本講座 (the Intensive English for Japanese Teachers) の副主任 Mr. Higley から講座全体と寮の使用に関して説明があり, 次に担当教官の紹介とグループ分けが行われた。約10名ずつ4班に分け, それぞれに担当教官が2名ずつついた。私のグループは Cactus Group と称し, Mrs. Willerman と, Mr. Skinner が指導して下さることになった。小グループに分かれてから担当教官を囲んで自己紹介。はじめは皆コチコチに緊張していたが, 指導教官のユーモア溢れる話しぶりや, くつろいだ態度に, だんだんとリラックスしてきた。翌日からの学習スケジュールについて説明があって後解散。各自部屋へもどりホッとする。もう8時を過ぎているのに外はまだ明るい。夏時間と, 中央時間帯の西部に位置しているためである。オースチン滞在中ずっと遅い日の出と日の入りに悩まされることとなる。朝は7時起床だが, まだ日は昇らず, 落ちついて勉強のできる夜の静かな時間になるのは9時すぎで, つい夜ふかしをしてしまう。

2. 講座の内容

テキサス大学オースチン校はその規模の大きさと教授陣の優秀さにおいて全米のトップクラスにあると言われている。300エーカー (120万平方米) の広々としたキャンパスに 110 棟以上の建物が整然と建ち並び, 緑の木立と芝生にはリスや小鳥が遊び, 無料バス, 巨大なスタジアム, スポーツ諸施設, 銀行, 郵便局, 病院, 各派の教会などがあって, 5万人の学生教授等の生活するいわばひとつの都市である。

1883年, 2つの学部をもって創立されたこの大学が, 今では12学部及び大学院に, 4,000ものコースを備えた完璧な総合大学となっている。言語学においては全米第5位にランクされており, 英語教育関係者ならだれでも知っている A. A. Hill 氏はこの大学の名誉教授である。本講座は毎夏, 日本人英語教師のために特別に開かれるもので, Speech Communication の専門家 Dr.

Joe W. Neal が主任となり、同部門の教授・助教授・講師合わせて 12 名の先生がたが指導に当たってくれる。次に毎日の授業の状況を述べる。

○ 8:30 L. L. にて20分間講義を聞き、要点をノートする。テープで同じものが再度流されるのをイヤホンで聞き、各自ノートを修正する。

○ 9:30 休憩。その間を利用して、講義のテーマを話題にしてキャンパス内の学生と会話をすることを要求される。

○ 10:00 小グループに分かれ、講義の要約文（200 語ぐらい）を作成し、指導教官に提出（翌日コメントをつけて返してくれる）。次に、休憩時の会話の報告と、さらにその話題を発展させてディスカッション。特に日本の場合との対比が重要視された。講義のテーマはすべてアメリカ社会に関するもので、政治・教育・宗教・スポーツ・音楽・美術・ボランティア活動などについてであった。

○ 11:00 口語英語聞きとり書きとり訓練。指導教官が米人同志の自然な会話文を自然な速さで読むのを聞きとったり、書きとったりする訓練で、最初はかなり苦勞した。11:30午前の授業終了。昼食は寮の食堂でとる。

○ 1:30 午後の授業開始。小グループ授業。500 語ぐらいの論説文を10分間で速読させた後、その内容についてのペーパーテスト。答え合わせの後、質疑応答とその論説文の主題に関するディスカッション。午前も午後もディスカッションがあり、積極的にしゃべることが常に要求されるのである。午後 3 時半授業終了。

3. 特別行事

○ 8月6日（土）バスでオースチン市内見学。

テキサス州議会議事堂はワシントン D. C. のそれと形はそっくりだが、こちらの方が 7 フィート高いそうである。ボンネル山よりコロラド川と緑の木立につつまれた市街を見晴らせる。テキサスは砂漠の州どころか、緑の牧場と森のどこまでも広がる豊かな州なのである。和歌山県出身の谷口氏が自力で作った日本庭園を見た。

○ 8月7日、夕方より Dr. Neal の所有する牧場（Horse Thief Hollow Ranch）でバーベキューパーティーが行われた。それにはテキサス大学の外国人留学生も参加し、国際色豊かなパーティーとなった。カントリー・ウエスタンの生演奏を聞きながら大きな焼肉をほほばり、メキシコ・コロンビア・エクアドル・ヴェネズエラなどの青年男女と英語で意志を通じ合えることは無上の楽しみであった。彼らは皆大へん陽気で、バンド演奏に合わせてダンスをしていたが、日本人はひっこみ思案で情けない。乾燥したさわやかな空気の中で生ビールがうまかった。

○ 8月9日 夕方からグループ別パーティー。米国人たちの前でひとり20分ずつ日本紹介のスピーチを行う。私は「漢字と日本語の表記法」というテーマで、自作の図を示しながら説明した。

○ 6月12日 朝からバスでサン・アントニオ市訪問。1863年3月6日テキサス軍がメキシコの大軍の攻撃にあって全滅した最後の砦、「アラモの砦」を見学。さらにはスペイン風の建物の並ぶ下を流れる川を小舟で周遊し、エキゾチックな雰囲気を楽しんだ。

・8月13, 14日 ショート・ホームステイ。2名ずつ米国人の家庭に一泊し交流を行う。私は大阪出身のN氏と共に市内のコシャーン氏宅に泊る。彼は空軍在役中5回日本を訪れたことがあり、退役後テキサス大学でマスターの学位をとり、現在市内のトラヴィス高校の地理の先生をしており、日本の事情にくわしく、大へんな親道家で、夜更けまで一家（夫妻と2人の娘さん、1人の息子さん）の方々と会話を楽しんだ。翌日夫妻と共にカトリック教会へ。若い人たちもかなり礼拝に来ていた。礼拝後、神父さんともお話ができて幸いであった。昼は一家でディナー。鶏肉を主とした家庭料理の味は又格別であった。

・8月20日 オースチンの北東にあるテイラー市を訪問。途中、広々とした綿花畑で綿のつみ取りをしているのを見た。綿花はまさに綿そのもので、綿織り工場で綿と種に分ける。そこで働く黒人たちにカメラを向けたら笑って手を振ってくれた。オールド・ブラック・ジョーのような暗い表情は全くなかった。市のロータリー・クラブ主催のディナー。ミス・ロディオも参加し楽しい雰囲気であった。夕食後いよいよロディオ見物。荒馬乗り、馬上から牛に跳びかかり組み伏せる競技、馬上からロープを投げて牛を捕える競技。荒牛乗りなどが延々3時間余り繰り返された。アメリカ人の野性とエネルギーをまざまざと見せつけられた。

・8月26日 テキサス大学名誉教授で英語学・英語教育学の権威 A. A. Hill 博士の特別講義があった。英語教育が英語学の正しい知識に基づくべきこと、特に日本語と英語の音声と文法構造の差を正しく認識しなくてはならないことなどが強調された。博士は長身で血色もよく、とても77歳の高齢とは思えぬほどかくしゃくとしておられた。

・8月28日 夕方から研修終了証書授与式が Dr. Neal はじめ関係全教官が参加して寮の食堂で開かれた。つづいて当市在住の日本人婦人数人が手づくりで用意してくれた日本料理で会食を楽しんだ。お世話になった先生方への慰労のため、われわれ日本人が各グループごとに日本の歌を合唱したり、尺八やピアノの独奏をしたりした。先生方は皆、真夏の暑いさ中に実に精力的に献身的にわれわれの指導に当たってくれた上に、自宅へ招いて昼食をごちそうしてくれたり、ドライブにつれていってくれたりした。御好意に対し心から感謝して止まない。

・8月29日 個人研究の結果の発表。各自自由なテーマでインタビューによる調査を行い、その結果を口頭で発表することが求められていた。私は「アメリカの高校における外国語教育」というテーマで20項目の質問を用意し、10日間にテキサス大学の学生や通行人など20名から話を聞いてまとめたものを発表した。ちょうど夏休み中で、高校の先生や生徒から直接話を聞くことができなかつたのは残念であったが、質問を受けた人たちは皆快く答えてくれた。調査の結果として言えることは、多くの高校で、スペイン語かフランス語を選択科目として毎週5時間以上教え、テープを有効に用いて話すことに力を入れていること。1クラス25名以内。ネイティブ・スピーカーが指導に当たっている高校もかなり多いこと。高校卒業後、特にスペイン語が日常生活に役立っていることなどである。

・8月30日 午前中、この講座全体についての報告書を作成する。午後公園で指導教官をまじえてグループ対抗ソフトボール試合。青空と緑の芝生、白球。楽しいひと時の後ビアホールでの1

杯は最高であった。

〔3〕 サンタ・ローザでの研修

1. ホームステイ

9月7日から18日まで10日間、サンフランシスコ北方60マイルにあるサンタ・ローザ市在住のシーアン氏夫妻のお宅に家庭滞在。主催者(C. I. E. E.)のあっせんで、出発前からすでに文通をし写真も交換していたので、はじめてお会いしたとき、ずっと以前からの知り合いであるかのような親近感を覚えた。シーアン氏は78歳。もと電子工学関係の専門家で白髪長身の温厚な紳士であり、奥さんは小学校での教職歴もあり、68歳になった今も教会の福祉活動に参加している活発で若々しい方である。息子さん娘さん共米国東部で独立した家庭を持ち、シーアン氏夫妻だけでこの緑豊かな気候温和なサンタ・ローザにもう20年住んでおられる。やはりお子さんと遠く離れていてお淋しいのか、私の滞在中話がとぎれる間がなかった。その上、ある時は植物園へ、ある時は森林公園へ、さらに太平洋岸へ、またある時はぶどう園とワイン工場へとドライブにつれていってくれたりした。私も日本から持って行ったスライドを見せて日本人の日常生活や学校生活、神社仏閣などについて説明したり、日本の民謡のテープを聞かせたり、書道の実演などをしてあげた。

2. サンタ・ローザ中学の状況

9月8日からサンタ・ローザ中学へ出勤。毎朝シーアン氏が8時半に学校に着くように車で送ってくれるのはありがたかった。新学年が9月6日に始まったばかりで、校内は忙しそうであったが、国語担当の Ms. Nazarek の世話でまず校長の Mr. Thomas にお会いした。校長先生の御案内で各教室を見て回った。校舎はコンクリート造り平屋で、すべて教科教室制であり、同系統の教科が同じ棟に集められている。校舎全体がエアコン完備、床はカーペットを敷きつめ、ゆったりしたスペースの教室には、必ず星条旗が正面にあり、各教科担当者のアイデアで自由に机・椅子・黒板・壁面がレイアウトされ、各室に O. H. P. とデイライトスクリーンが備えつけてある。図書館には各種の図書のみならず各種教材用スライドや映画(8mmと16mm)が用意されていて、映写機と共に必要に応じて授業に活用できる準備がととのっている。生徒数は今年度682名。男女半々で、かなりの数の黒人とメキシコ人が混ざっている。生徒の能力差に対応すべく選択制とカウンセリングの強化を計っている。生徒はのんびりしており、毎日同一時間割で金曜日まで学習する。毎日の時程は次のとおり。

第1時限 9:05—9:55

第2時限 10:00—10:50

ホームルーム 5分間(主として放送による伝達。)

栄養補給のための休憩 10分間

(この時間、生徒は校内の売店でジュースやお菓子を買って食べてよいことになっている)

第3時限 11:15—12:05

第4時限 12:10—1:00

昼食 1:00—1:35

(校内のカフェテリアで昼食を買って食べる者が多い。1ドルほどでサンドイッチかハンバーガーに牛乳かチョコレートアイスと果物がセットになったものが買える)。

◦昼休み時間のみ、外出許可証のある者に限り外出が許される。

第5時限 1:40—2:30

第6時限 2:35—3:25

クラブ活動参加者以外は直ちにスクールバスで下校する。生徒は教科書とロッカーが貸し与えられていて、自らの責任で管理する。公共物の破損に際しては直ちに弁償を求められる。教科担当(合計33名、女性15名)は教科指導に専念し(平均週24時間)、生活指導は主としてカウンセリング専門の教師(3名)が行う。校外の生活指導は副校長(2名)、カウンセリング担当教官(3名)、市の教育委員会の児童福祉課の人たち、各地区の P. T. A. のメンバーが協力して行う。生徒会は各学年から選出された役員12名で構成され、政治色は全くなく、主として校内の諸行事の企画推進に当たる。その他イヤーブック(アルバム)や学校新聞の編集にも参画する。

学校運営に関しては市の教育委員会と学校長、副校長によって新学年開始前に細部に至るまで決められ、印刷物で全教官に指示される。全教官はその指示に従って自分の職責を果たすことが当然とされていて、教官のエネルギーは教科指導と自分の教室の管理に注がれる。授業が終ると直ちに全生徒を教室から出し、鍵をかけてしまう。学校長は校内巡視を行い、各教官に対し勤務評定を行う。

3. 授業参観の状況

9月8日 Miss Herrera 担当の「スペイン語初級(選択科目)」を参観。7学年、8学年の混成学級で20名。教室へはいって行くとさっそく先生から生徒たちに紹介され、生徒たちが好奇の目を注ぐ中で自己紹介を行う。少し時間をさいてもらって、日本から持って行った学校紹介と中2生徒の自己紹介を入れたテープをかけ、テープ・レターの交換をお願いしたり、中2の生徒から送られて来た日本紹介の絵はがきを配って、文通を呼びかけたりした。生徒たちは大へん協力的であった。スペイン語の授業の進め方は日本の英語の授業の方法と大差ないが、「話すこと」に特に力を入れていること。先生のスペイン語が非常に流ちょうで、息もつがせぬほどスピーディーにドリルを行うこと、生徒の反応が速く正確であること。教室が地図や絵や写真によってスペイン語の教室らしい雰囲気を出すよう工夫されていることなどが大いに参考になった。

9月9日 Mr. Carmody の「音楽ラボ(選択科目)」見学。生徒自身の音楽への参加を中心とした授業で、生徒の好きな楽器が自由に選べ、学べることになっている。学年始めて生徒(25名ぐらい)に対しオリエンテーションの段階であった。日本の民謡のテープを持っていたので、私が簡単な解説をして聞かせた。初めは聞きなれない音色とメロディーにめずらしそうであったが、やがて退屈してざわつきだした。そこで日本の流行歌を聞かせると急に表情が明るくなり、リズムに合わせて体を動かすはじめた。生徒は異質のものには拒否反応を示し、同質のものはすぐ理

解するようである。

9月13日 Mrs. Pedersen の「フランス語初級（選択）」を見る。7学年25名。生徒めいめいにフランス人の名をつけて呼んでいた。スペイン語の授業と同様、口頭作業中心に進められていた。彼女の美しい発音と生徒の速い理解に驚いた。この教室もフランスの風景画や写真などでフランスの雰囲気をかもし出していた。彼女はこの授業の後直ちに車で市内のモントゴメリー高校へかけつける。私も同行させてもらって高校のフランス語の授業を拝見。高2高3の混成クラスで中級フランス語を学習する。大半がフランス語会話。ここでも生徒の名前をすべてフランス名で呼ぶ。次にテキストを用いて文法練習、つづいて雑誌を用いて速読訓練が行われた。

9月15日 Mrs. Kelly の「Drama（選択）」の授業を見る。教室は小劇場そのもので、すべての設備がととのっている。生徒（8、9学年25名）は課題が出されていて、家で練習してきたとおり皆の前で独演してみせる。はにかんだり笑ったりするときつく叱られる。だから皆真剣そのもの。この日は喜びから悲しみへ感情が急変するシーンを演じることが求められていて、それぞれ工夫をこらした名演技を見せてくれた。

以上、印象深かった授業について報告した。

4. 研究授業

9月9日から9月16日まで、のべ23の学級でスライド（自作のもの）や日本のお金、漢字と仮名文字表などを見せながら日本紹介の授業を行なった。特にスライドで、学校生活、家庭生活、古い神社仏閣、東京の近代的ビル群など日本のいろいろな側面を紹介した。生徒が最も関心を持った事柄は、日本の現在の姿で、特に彼らのものと共通のものを発見したとき喜びの声が上がった。例えば、野球のシーン、マクドナルドやケンタッキー・フライド・チキンの店など。生徒は日本の古来の文化や現代の日本人の生活について意外に知識が乏しく、反面、日本が売りこむ商品の名前（トヨタ・ホンダ・ソニー・ミノルタなど）をよく知っている。外国との真の相互理解のためには、もっともっと積極的に若い世代の人たちの交流を行い、このような偏った状況を根本から正していかななくてはならないことを痛感した。幸い、私のスライドによる日本紹介は好評で、歴史、国語やさらには家庭科や理科の授業時間までもスライド上映に当てられるほどであった。その結果多くの先生方や生徒たちと知り合いになることができ、廊下や校庭、さらには町の中でも Hi, Mr. Onishi. と生徒にあいさつされるほどになった。また何人かの先生のお宅へディナーにさそわれたりもし、すっかり親しくなった。研究授業は大いに英語を話す訓練になったのに加えて、アメリカの中学生の日本に関する知識や関心度を知る上において大変プラスになったし、何よりも多くのアメリカ人と親しくなることができたことは大収穫であった。今後もサンタ・ローザ中学の先生方、生徒たちと文通によって交流をつづけていきたいと思っている。本校の生徒たちとの文通やテープの交換が盛んに行われるよう大いに助力したいし、さらには、両校の生徒同志の交換留学が実現することを夢みている。

まる2か月のアメリカでの生活を通じて私はアメリカの国土の大きさと多様性、アメリカ人の

親切心を常に感じてきた。誠意をもって相手に接すれば、言葉のちがいによる障害は大して問題ではないので、もっと積極的に市民同志でつき合い、市民同志の相互理解が一層深まっていくよう努力するべきで、こうすることこそ真の平和への道であると確信する。

(1977年10月15日)